

中等2年生音楽科学習指導案

1. 題材名

歌における英語と日本語の違い

教材：「Puff」作曲：Peter Paul, and Mary 『永遠のポップス第1巻』（全音楽譜出版社）

「パフ」作曲：Peter Paul, and Mary 日本語訳詞：芙龍明子 編曲：飯沼信義

『中学生の音楽1』（教育芸術社）

2. 題材の目標

（1）教科としての目標

○洋楽のリズミカルな表現に親しみ、歌における日本語や英語の特徴の違いについて理解できる。

○提案や議論、試行、改善を繰り返し、より良い日本語歌詞の選択や表現の工夫ができる。

（2）汎用的スキル

洋楽の和訳化を体験することで、言語と音楽のつながりに対する理解、及び感性を刺激する。（感性・表現・創造の力）／ルーブリック（評価規準表）を活用しながら課題の相互評価をしたり、グループ作品や演奏についてフィードバックを得たりすることで、作品を客観的に捉えることができる。（メタ認知力）

（3）態度・価値

より良い日本語歌詞の探索、自然な音楽表現となるための試行と改善を繰り返すことで、カバー作品の価値について見つめ直す。（好奇心・探究心）／グループで議論や練習を繰り返すことでより良いものを協働で作るために必要な態度やスキルを育む。（協力し合う心）

3. 生徒の実態

本校は、海外滞在歴のある生徒と日本出身の生徒が約半数ずつ在籍している。洋楽、邦楽への興味は中等1年生段階ではまだ極端だが、学年が上がっていくに連れて相互に刺激しあい、幅広く世界の国々の音楽に親しんでいく生徒が増えていく。中等1年生段階ではまだ英語に学んで日の浅い生徒もいるが、意外にも英語圏出身の生徒であっても、歌における英語と日本語の様々な違いについて漠然とした理解である生徒がほとんどである。1年生は好奇心旺盛で、楽典的知識に差はあるが、歌を和訳化することや協働で作品を作るということに対して前向きである。本題材で歌における言語の特性の違いについて理解を深め、同時に協働で作品を作る上で必要となる姿勢やスキルなどを伸ばせるよう支援していく。

4. 題材について

①IBMYP（国際バカロレア中等教育プログラム）：音楽科の観点から

歌唱活動において、歌詞を読み解くことは生徒の感性を育み、表現力を伸長するものである。本題材では、生徒はいくつかの問いをもとに歌詞やメロディーへアプローチしていく。例えば、概念的な問い掛け「異なる言語に置き換えることで得られるメリットやデメリットは」などであり、これは国内外の歌曲が別の言語にカバーされることで生じる変化について考えを深められる。生徒は個人や集団での和訳活動を通じてその音楽的な難しさを体験しつつ、オリジナルを変化させることの是非についても考えを巡らせることで、教科内の学習に留まらず広くグローバルな文脈へとつながりを持つことができる。

②汎用的スキルや態度・価値育成の観点から見た特性

生徒同士が題材ルーブリック（評価規準表）を活用しながら個人の作品を相互に評価しあったり、教師がグループ活動中に複数回フィードバックを行ったりすることで、表現や発想、課題の取り組みに対してメタ認知することができる。そうした共有の場は、協力し合う心を育むためにも有効であると考えられる。

5. 題材計画と資質・能力を育成する主な手立て（全6時間 本時2／6時間）

	学習活動	関連する主な資質・能力	資質・能力を育成する主な手立て
第1次 2時間	・Puff の歌唱を通じて、子音や母音の扱い方について学ぶ。 ・歌における日本語と英語の違いについて文法面や言葉の発音から理解する。	○感性・表現・創造の力 ○好奇心・探究心	○ルーブリック（評価規準表）で課題の評価規準を提示する。 ○視覚的に英単語と日本語の言葉の語順や構成の違いについて示す。
第2次 4時間	・旋律やリズムを考慮して、英語歌詞の1番を日本語に訳す。 ・グループで相互に考えた案を発表、評価する。グループで1つの作品を制作する（歌詞の1番まで）	○メタ認知力 ○協力しあう心	○個人課題についてフィードバックを得られるよう、相互に良い点と改善点を指摘し合うよう促す。 ○ゴールとなる作品の模範提示をし、課題をオープンエンドにする。

6. 本時の学習指導

(1) 本時のねらい

- ・日本語と英語それぞれの歌い方について理解を深める。
- ・歌における英語と日本語の違いについて、文法や発音などの特徴と違いを分析し、理解する。

(2) 本時の展開

時間	○学習活動 ・ 予想される生徒の反応	◇資質・能力を育成する主な手立て◆評価
導入 5 分	Puff の英語オリジナル版と日本語版は、何がどのように異なっているか？ ○前時の復習として Puff（英語）オリジナルと日本語訳版を歌唱する（歌詞の 1 番分） ・子音とか母音で何だったっけ？ ・日本語は意味がわかるけど、どこかリズムが単調だね。	◇前時の復習から、英語と日本語のそれぞれで歌うときの注意点や工夫すべき点を思い出させる（好奇心・探究心）。
展開 35 分	○英単語の発音とリズムについて理解する ・単語にリズムがある。普通に話したら Tom-mor-row はタタータ（シンコーション）だ。日本語の「あした」はタタタ。 ・子音が単語の前後にあることとか、母音が途中で変わるのも日本語にあまりないから、慣れない。どのタイミングで発音すれば良い？ ○「文法による語順の違い」に伴う、歌詞のタイミングのずれについて理解する ・英語が SOV という順番なのに対して日本語は SOV だから、英語と日本語で同じことを言っている、オチの順番が何となく異なるのはわかった。 ・メロディーの頂点に来る言葉が時々違う理由がわかった。 ○「歌詞の譜割りのされ方と情報量の違い」について理解する ・英語は音符 1 つに 1 音節入るから、lived（くらしてた）などは音符 1 声で言えるんだ。日本語だと 5 つもいる。 ・歌詞の量も全然違う。英語だとたくさん単語が入りそうで、日本語は 1 つの言葉を言うのに音符がたくさん必要だから、歌詞が少なくなると思う。 ・日本語訳だと英語オリジナル版にあった歌詞がなくなっているときがある。	◇「英語と日本語とでは何が異なるだろうか」と言う問いかけから始め、生徒の反応を見ながら徐々に提示をしていく。挙手をさせて、意見を出させる。 英単語の持つ響きを音楽的に分析するため、黒板に単語を書き出し、子音と母音についてや、単語のもつリズムを音符で示す。（感性・表現・創造の力） 同じ意味の例文を英語と日本語の両方でホワイトボードに書きだし、語順の違いや譜割りの違いについて提示する。（感性・表現・創造の力） 同じ意味の歌詞が楽譜の中でどうなっているか、生徒に探させる。例えば、英語オリジナル版は「lived」という単語が音符 1 つに宛てがわれているのに対し、日本語訳版は「くらしてた」と音符 5 つに宛てがわれている。（好奇心・探究心）
結末 10 分	○英語オリジナル版と日本語訳版の注意点を改めて確認し、両者の特徴を味わいながら歌唱する。 ・今まで漠然としていたけど、何で英語版と日本語版でこんなにずれるのかがわかった。 ・英語で歌うのも難しいけど、日本語の文節で区切って歌うのも感覚が違うから、それぞれ難しい。 ・英語の授業でも歌を歌うけど、あまりリズムとか意識しなかった。音楽的に考えると、洋楽がリズムカルなのがわかる。 ○プロセスシートへの記録と、次回までの課題の把握 次回までに、英語歌詞の 1 番を自分なりに日本語訳にしてくる。その際、プロセスシートに日本語歌詞を選んだ根拠を記載する（ルーブリックの観点 A に該当）。	◇英単語の発音やリズム感を意識しながら歌い、重要な単語を強調するよう促す。日本語は文節で区切り、言葉の頭を強調させ、抑揚をつけるよう促す。（感性・表現・創造の力） ◆プロセスシートに本日の学習事項と、そこから考えたことや他の教科や分野と結びついたことについて記述する。 ルーブリック（評価規準表）の観点 D が対象。（メタ認知力）

●生徒のプロセスシートの記述記録あり。映像記録はなし。本稿ではルーブリックの紹介は省略。